第２章
旧１市４町の沿革

１．山鹿市

①概況

菊池平野の西北部に位置し、周囲を菊鹿町、鹿北町、三加和町、菊水町、鹿央町及び鹿本町に囲まれた県北部の政治、文化の中心地である。北部は標高648メートルの西岳、409メートルの三ツ尾山等が連なって山岳地帯をなし、南部はこれらの山に囲まれて盆地を形成している。菊池川本流が南部を東から西へ流れ、これに周囲の山に源を発する岩野川、吉田川、千田川等が合流している。これらの河川に沿って田畑が開け、中心部は近郊農村を背後地とした商業都市であり、また温泉を要する観光都市でもある。

交通は比較的便利である。国道３号が南北に、国道325号が東西に市の中心部を貫通し、これを基線として山鹿より玉名を経て大牟田に通ずる道路、菊池を経て大津に至る道路、南関、瀬高を経て柳川に至る道路等があり、これらをＪＲほか民間会社の定期バスが運行されている。

名所として里人が熊襲平定に成功した景行天皇の遺徳を讃えて祀ったのが始まりで、鹿本、菊池、熊本の地方に多くの崇拝者を有する大宮神社があり、またこの神社に因んで有名な山鹿灯籠がある。この灯籠の起こりについてはいくつかの伝説があるが、いずれにしても相当古くから行われていたもので、形式も宮造り、人形灯籠、金灯籠、座敷灯籠などすべて和紙と糊で作られる精巧なものである。

②市名の由来

保元の乱（1157年）により都を落ちた宇野親治という武士がこの地方の山に狩をしたとき、谷間に鹿が群れているのを不審に思って調べたところ、温泉を発見し、以来各地から人々が集まって住居を定めるようになったが、これが「山鹿」の名の起源であると伝えられており、また豪族山鹿六郎重光が治承３年（1179年）にこの地に市街をひらいたので、年とともに人々が移り住んだことから山鹿が生じたともいわれている。しかし、奈良朝時代（708～781年）の肥後の風土を記したものには、山鹿の名が見えるので、相当古くからこの名があったものと思われる。

この名は、旧藩時代の山鹿手永、明治の山鹿郡、山鹿町と行政区域の名称に用いられてきたばかりでなく、山鹿温泉、山鹿灯籠の名において受け継がれており、合併に際しては、関係町村一致して異議なく、この由緒ある「山鹿」を選んだ。

２．鹿北町

①概況

県の西北端に位置し、東は菊鹿町に、西は玉名郡三加和町に、南は山鹿市に、北は小栗峠を境として福岡県八女郡立花町に接している。総面積の67パーセントを山林が占め、田畑は河川流域に点在し、平坦部は少ない。町の中央を岩野川が流れ菊池川に注いでいる。

農林業が基幹産業で、農業では米を中心に、茶、筍、栗等の特産物、菊、スイカ等の施設園芸、畜産の組み合わせによる複合経営を行っている。林業は銘木鹿本アヤスギの産地である。

熊本、福岡を結ぶ国道３号が町中央部を西北から南に貫き、県道菊池鹿北線、黒木鹿北線が国道３号から分かれ、菊鹿町を経て菊池方面と福岡県方面への幹線道路となっている。

景勝地として岳間渓谷があり、県境の国見山に源を発する清流が５キロにわたり見事な渓谷美をなしている。夏は避暑客も多くキャンプ場として多くの人で賑わっている。

②町名の由来

合併に際し、新村名を合併三か村から公募した。応募したものの中で、応募の多かったもの10村名を選び、合併協議会委員が検討し、投票した結果、「鹿北」13票「三栄」11票「小栗」４票の順となり、一番多い「鹿北村」を村名とした。

村名は、新村の地域が熊本県の最北端であるとともに鹿本郡の北端にあり、また泉都山鹿の北に位置することから名づけられた。

３．菊鹿町

①概況

熊本市から北に30キロメートル、熊本県の北端に位置し、北東の一部は福岡県、大分県と境を接し、面積の約３分の２を山林が占めている山間の町で、緑と清流の史跡に恵まれ、昭和47年には自然休養村の国指定を受けている。

北部から東部にかけて八方ヶ岳、三国山、国見山など標高一千メートル級の山々が連なり、これらの山岳地帯に源を発する内田川、木野川などの清流が山あいの耕地を潤しながら南へ流れ、菊池川に注いでいる。

交通は、国道325号に通じる主要地方道日田鹿本線、県道熊本菊鹿線、菊池鹿北線が幹線となっている。また、産業としては、水稲を中心として畜産、野菜、栗、筍、椎茸、茶などの複合経営による営農が行われてきたが、近年、第一次産業従事者が減り、第二次・

三次産業へ移行している。

名所旧跡としては、1175年前伝教大使が開基し、菊池家及び細川家の祈祷所でもあった「相良観音」、日本に一本しかなく、昭和26年に国の特別天然記念物となった「アイラトビカズラ」、避暑地として、また紅葉の名所として知られている「矢谷渓谷」、約1300年前大和朝廷が築いた「鞠智城」がある。また、平成６年には体験ができる観光施設、菊鹿町特産工芸村「あんずの丘」がオープンしている。

②町名の由来

合併に際し、新村名を広く合併三か村の住民から公募したところ、応募総数は683点に達したが、その大部分が「菊鹿村」で、ほかに「八筈村」もあった。合併協議会で慎重審査の結果、合併三か村が菊池郡と鹿本郡に属していたので、その郡名を一字ずつとった「菊鹿村」が一番適当と認められ、満場一致で新村名を「菊鹿村」と決定した。昭和40年10月１日町制を施行して「菊鹿町」となった。

４．鹿本町

①概況

鹿本郡のほぼ中央に位置し、東は菊池郡七城町を経て菊池市、西は山鹿市、南は植木町に接し熊本市まで約25キロメートル、北は菊鹿町と接し、山鹿市と菊池市を結ぶ国道325号の中間にある。標高30メートル～60メートルの平坦地で一級河川菊池川が東西に貫流し、これに準用河川が３本合流、温暖な山紫水明の地であり、肥沃な平坦耕地を持ち、古来より菊池米の主要生産地として知られている土地である。

町の農業は、菊とメロンが中心であるが、近年では施設の導入に伴い多くの農産物が生産されるようになった。ただし、全国でも見られるように、鹿本でも後継者不足、高齢化は、深刻化しており、町の最重要課題となっている。

商業では、県下有数の町並みとして栄えた来民の商店街を復興しようと、盛り上がりを見せている。

観光の面では、昭和62年度から整備を進めてきた一本松公園が、平成７年３月に完成。

キャンプ広場やテニス広場が完成し、平成６年に完成した石の風車を見ようとする人と合わせて休日は多くの人で賑わいを見せている。

また、本町来民の明照寺には、本町の出身で、松方、山県、桂の各内閣の法相を経て、大正13年内閣総理大臣となり、後に伯爵を授けられた清浦奎吾の墓があり、毎年11月５日、遺徳を偲んで墓前祭が行われる。

②町名の由来

新町名の選定については、合併町村住民の意思を尊重するため、合併三か町村から公募したところ「鹿本町」「稲富来町」などの順で多数の応募があった。旧名称には各町村とも相当の執着があったが、新町の円満な発足が先決であるとして旧町村名を一応捨て去り、新鮮な名称により発足することに意見が一致した。

新町は、隣接の旧山鹿町が新市として発足後は、将来あらゆる点において鹿本郡の中心として発展することが期待されたので、満場一致をもって「鹿本町」に決定した。

５．鹿央町

①概況

熊本県の西北部に位置し、周囲を山鹿市、鹿本町、植木町、及び玉名郡玉東町、菊水町と隣接する面積31.47平方キロメートルの農業の町である。町の南西部には国見山（388メートル）、中西部には米野山（301メートル）がそびえ、これから東部に畑台地が広がり、北東部の平野には水田が広がっている。南西部を江田川、中央部を岩原川、東部を千田川及び宮原川が流れており、田を潤わせながら菊池川に合流している。

基幹産業は農業で、中央部の畑台地を中心としたスイカ・メロンのほか、水稲・葉たばこなどが栽培されており、畜産も行われている。

町の南西部を九州縦貫自動車道、北東部を国道３号線、中央部を県道山鹿植木線、南西部を県道大牟田植木線、東部を植木山鹿線が縦横断している。

本町は、岩原古墳群、千田聖母八幡宮及び八島にまつわる伝説、或いは霜野由来記に見られる康平寺などからうかがえるように古代より文化興隆の地であり、国指定史跡の双子塚古墳をはじめ、霜野山康平寺の二十八部衆像及び千手観音像の県指定文化財など遺跡・遺物が数多く残されている（国指定１・県指定４・町指定21・町認定16）。

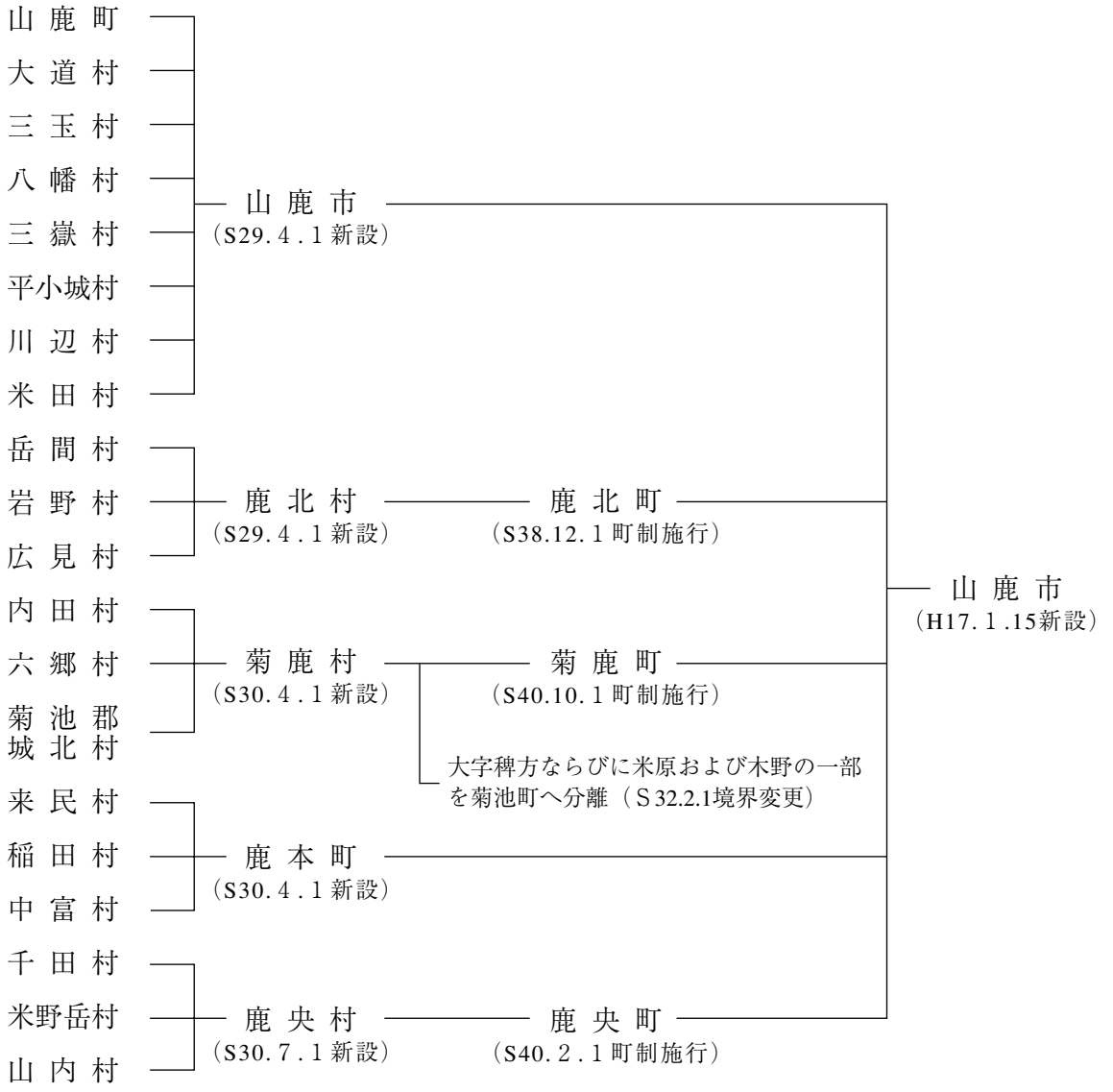
岩原古墳群周辺は、熊本県の肥後古代の森整備事業により整備が行われ、平成４年に装飾古墳の実物大レプリカ等を備えた全国唯一の県立装飾古墳館がオープン、また、平成５

年には鹿央町生産物直売所を設置し、町の農産物や工芸品等の特産品を試食・販売するとともに周辺の公園整備を行い、体験学習の場あるいはレクリエーションの地として県内外から広く親しまれている。

②町名の由来

合併に際し、新村名を広く合併三か村の住民から募集したところ、応募総数は451点に達したが、これを三か村合併協議会において慎重審議した結果、地域的、歴史的見地からみて、新村は鹿本郡の中央にあり、また、将来すべての面で郡の中心となって発展していくという意味で、「鹿央村」を最適と認め、合併協議会において満場一致で決定した。昭和40年11月１日、町制施行して「鹿央町」となった。

終戦後の合併経過



＜熊本県合併史より転載＞

第３章へ